

IV. キャリア再考への序章

学びの森の住人たち (20)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



3. 物語とキーコンピテンシー

私たちの実践の中から、不登校の子どもたちの自己変容は、彼らが自身のコトバを獲得する過程と重なっていることがわかってきました。彼らは、そのコトバを通して自分自身の過去を見つめ直し、その意味を置き換え、それを足掛かりにしながら、さらなる自分たちの新しいキャリアを築いていたのです。そして、そこには、彼ら自身の固有の物語がありました。

そしてやがて、その物語は彼らの家族や仲間たち、そして地域の支援者たちへと伝わり、しだいにその影響を与えていきます。まさに物語の持つ力によって、不登校という一つの社会現象が、再び社会へと回帰し、社会そのものに何かを働きかけようとした事例だと思えます。本稿の中では、京都府教育委員会の「フリースクール認定制度」、そして、アウラの森が主催する「ラウンドテーブル」を、その実例として取り上げました。私たちの社会の中に、ある仕掛けとある場を設定することで、再帰性を担保した社会循環型の学びのモデルが実現できる

こと、あるいはその意味についても触れてきたつもりです。

以上ここまで、ただ「苦しい」という思いの中にいた不登校の子どもたちが、学校でもない塾でもない学びの森という多層的な広がりを持った場で、自律的な学び、教師たちや仲間たちとの関係、そしてアウラの森の持つ環境と、その何かを足掛かりとすることで、再び何かを語り始めていく様子を見つめてきました。そして私たちはこの過程の中に、先に取り上げたキーコンピテンシーを満たす営みの存在を感じ取っていきました。

DeSeCo プロジェクトにおけるキーコンピテンシー *Key Competency* は、自分とは違う他者と出会い、関係を構築し、その考えを自分のものといかに統合するかを目標においた学力概念（「社会的に異質な集団での交流」というカテゴリーで表現）です。そして、その目標を達成するために、「自立的に行動する能力」や「コトバ等のツールを相互作用的に用いる能力」（リテラシー）を要求しています。このキーコンピテンシ

一では、自分自身の既存する知の体系を他者の知の体系といかに統合させていけるかを大変大事なポイントとして考えています。多様化の一途をたどる現代社会においては、この「統合」そして「理解」といった過程こそが、世界基準の学びの柱であることは言うまでもありません。

しかし、一般的な学びの世界では、学習者自身の生活やこれまでの経験、知覚、認知といった個人の領域は、学びの対象から切り離されていきます。つまり、新しく出会う概念や知識が、学習者自身の固有の世界と統合されることはほとんどないのです。むしろ、その新しい知識をいかに効率よくテストや受験に活用できるのかということばかりが重視されてしまっているように思えます。多くの情報を集め、機能的な問題解決法を手に入れて、とてもスマートに問題を解決していく。この過程を振り返った時、確かに効率よく問題は解決されたわけですが、その一方で、果たしてどこに異質な世界と出会いがあり、どこに自己が統合されていくような過程があるのだろうか、首をかき上げてしまうことも事実です。

しかし、一方で不登校の子どもたちの学びの世界を見てみると、そこにはまるで生まれ変わるかのような変容が見られます。

「キーコンピテンシーは、一旦挫折を味わったりすることで獲得できる能力かもしれない」と思う時さえあります。そしてそんな時、大変有効に機能するものがコトバであり、物語であると私たちは考えています。今までも繰り返し述べてきたように、アッコは自分の過去を振り返り「棘が取れてき

た」と表現し、サトルは「土台作りをしてきた」と表現し、ユキエは「二年前の私に言ってやりたい」と表現したそれぞれの物語が生まれる背景には、彼らが手に入れたキーコンピテンシーが確実に存在しているように思います。彼らは物語を通してキーコンピテンシーを獲得し、キーコンピテンシーを活用しながら物語を描いていくように思うのです。そしてこの〈個人の物語〉と〈キーコンピテンシー〉とが互いに交差する接合点にこそ、J.メジローの言う〈パースペクティブ変容〉が生じていくように思います。彼らはこの接合点における営みをアウラの森で経験し、その経験知を土台としながらさらなるキャリアへの地平を広げていったのだと思います。



4. キャリア再考への序章

アウラの森には、幾人かの大学生のスタッフがかかわってくれています。そして毎年この時期になると、あちらこちらから「どうしよう…」という声が聞こえ始めます。その理由は、〈就活〉が始まったからです。ここには、スタッフたちのキャリア形成というもう一つの物語があります。

かつて、アウラの森のスタッフを引き受けてくれていたサキが、顔を出してくれました。彼女は昨年、「就活が始まるので、アウラの仕事に迷惑をかけてはいけない」という理由で、スタッフの仕事を辞めました。黒いスーツ姿でやってきたサキは、一通り今の状況を説明した後、「自分が何をしたいのかわからなくなってきた」ということを私に話し始めたのです。

彼女の話によると、今どきの就活は、莫大な情報に埋もれてしまうような状況におかれることを意味するのだそうです。就活を始めると、いくつかの就活支援用のサイトに登録して情報を得るそうなのですが、そこから次々と情報が発信され、結局それに振り回されていくことになる。そればかりではありません。彼女は京都市内の某私立大学に在籍しているのですが、そのキャリアセンターがまたすごい。いろいろな資格講座や面接講座、就活セミナー、企業説明会…。それこそ、数えきれないほどの、仕掛けが用意されていて、それぞれの情報が学内のメールを通して各学生へと送られるようになっていくのです。ここでも学生たちは、大量の情報に埋もれることになるわけです。さらに学生たちは、自分の興味のある企業をネットで調べます。そこには、企業の経営的安全度から福利厚生の実度まで、さまざまな分析や口コミが載っていることでしょう。そしてここにまた、大量の情報との葛藤があるわけです。

サキは、そんな情報の渦に巻き込まれながら必死で「自分自身が何をしたいのか」、

「どういった基準で就職先を見つけていけばいいのか」を模索するわけですが、結局それさえもがわからなくなっていったというのです。それならば、最初から情報を制限しておけばとも思うのですが、なかなかそうはいかないようです。まわりが、そういった流れに乗っているわけですから、自分だけそうしないことはとても勇気がいるのです。実際、大変不安になるそうです。だからどうしても、たくさんの情報に埋もれてしまうことになるのです。

最近の大卒者就職内定率は12月の段階で約70%程度、そしてそのうちの30%は就職して3年以内に離職しているのが現状だといわれています。今の学生たちは、大量の情報の渦の中にあって、その渦に巻き込まれるかのように就活を終え、自分たちのシゴトを手にしていくのかもしれない。

このサキのエピソードから、現代の一般的な大学生の多くが、就活をめぐるはともたたくさんの情報に翻弄されながらも、その活動を続けている状況が読み取れます。ましてや、昨今のように厳しい就職状況ともなれば、なおさら、「自分が何をしたいのか」ということが置き去りにされていくのかもしれない。自分たちの思いとは関係のないところであっても、人気があるとされる企業に学生たちは集まるからです。そしてそのことが、どこかで高い離職率とつながっているようにも思います。個人の思いと切り離されたシゴトの中では、その厳しさに対してなかなか意味を見出すことができず、結局その辛さが離職ということにつながっていくように思うのです。

そして、そんな大学生の就活とは対照的なカタチで、本稿で紹介した不登校を経験した子どもたちのキャリア形成があります。サトルは、大学院へと進み、ヒロシは大手自動車メーカーのディーラーへと就職していくのですが、ここで大事なことは、彼らのキャリア形成が、彼らの個人の物語と絶えず交差していたという事実です。サトルは、「得体のしれない不安」と向き合うために、それを言語化し、さらに理論を持ってそれを相対化していくために大学院へと進んでいきましたし、ヒロシにおいては、自分の抱えるコミュニケーションのコンプレックスをいかに克服していくかという文脈が、そのキャリア形成の過程を貫きます。その他にも、自分自身の発達課題と向き合いながら助産師となったエミ。彼女は自分自身の命と向き合うために、生まれてくる新しい命の誕生という現場に立ち合う決意を持ちました。また拒食症に苦しみ、毎晩お母さんが「自殺しているんじゃないか」と不安になりながら、ベッドを覗き込んでいたケイコは、食へのこだわりから、管理栄養士になり、現在、福祉施設で働いています。

非不登校である今の大学生の就活と不登校であった彼らの就労。それらをキーコンピテンシーという座標面で捉えた時、そこに浮かび上がってくる違いは、〈個人の物語〉へのこだわりであったのかもしれませんが。不登校という厳しい現実を通過した彼らは、その過程で自らのコトバを見出し、それを使って過去を再構築し、一つの物語へと仕上げていきました。そしてこの過程

を媒介として彼らはパースペクティブ変容の経験知を手に入れていったのです。アッコが「リアリティ」と表現し、サトルが、「土台作り」と表現したものは、まさにこの経験知だったようにも思えます。そして彼らは、変容の経験知をしっかりと手に入れながらアウラの森を巣立っていき、それぞれの世界で、さまざまな課題に直面しながらも、自分自身の物語を描き続け、そのキャリアを形成していくのです。